

【研究ノート】

男子学生が保育者を志す意識に関する研究

大村 良恵*・松本 佳代子**・氏家 博子***・戸田 大樹****

摘要

本研究では、男子学生が保育者を志す意識を明らかにすることを目的としている。結果、男子学生は高校に入った頃から保育者を希望した者が多いことが明らかとなった。また、男子学生は女子学生に比べ、具体的なきっかけが特にあったわけではなく、進路を決めなければならなかったこと、単に資格が欲しかったことを志望動機としていることが明らかとなった。これらのことから、現在、保育者を志す男子学生の特徴として、積極的または消極的な志望動機の二極化が起きていることが想定される。このような消極的な動機を抱えた男子学生は、実際に現職保育者になったとしても離職につながる可能性が高いことが示唆された。

1. 問題と目的

近年における母親のみの単身家庭の増加を踏まえ、男性保育者の増加の必要性を訴える声が高まっている。保護者を対象とした男性保育者に対する意識調査(斎藤, 2002; 松本・宮宅・澤津, 2014)があるが、松本ら(2014)は質問紙調査によって、対象者である9割の保護者が男性保育者の存在に賛成していること、男性保育者がもっと増えてほしいといった期待が自由記述に綴られていたことを報告している。

また、国立情報研究所における男性保育者に関する研究テーマを概観してみると、柏・佐藤(2015)による子育て支援における男性保育者の役割に関する研究

* 聖徳大学大学院児童学研究科・院生

** 共立女子大学

*** 草苑保育専門学校

**** 創価大学

や男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響に関する研究（中田，2002）、戸田・松本・氏家・荒木・飯塚・高橋（2017）の男性保育者の必要性和理想的な保育者の男女比に関する研究など様々である。本研究は、男性保育者に対する近年の社会的期待を踏まえ、男性保育者の意識に関係する研究であると位置づける。しかし、男性保育者の社会的な必要性の高まりに反し、男性保育者の早期離職率の高さが問題とされている。

卒業生を対象とした意識調査（長田，1997；氏家・松本・戸田，2013；安井，2013）において、安井（2013）は男性保育者として働いている卒業生は「女性では難しい仕事でも男性だからできることがあると考える」と積極的な意識がある半面、「給料面を考えると生活していくには厳しい」、「偏見がある」という葛藤にも似た消極的な意識を自由記述から報告している。ここでの後者の消極的な意識は、男性保育者の早期離職につながると考えられる。男性保育者を対象とした離職に関する研究として、富田・小野（2011）は過去に保育所や幼稚園で働いた経験がある卒業生に質問調査を行った。その結果、数名という退職者のデータではあるものの、男性保育者が経済的な理由などから1年から3年以内に早期離職していることを報告している。また、男性保育者に働く意思があつたとしても、契約切れによる就労継続の断念という退職が存在することを報告している

さらに、氏家ら（2013）は保育者養成校（以下、養成校とする）の卒業生（卒業後5年未満の者）であり、保育所または幼稚園を実際に退職した元男性保育者を若干名ではあるがその対象とし、就労期間や退職理由、現在の仕事とその満足度を調査した。その結果、元男性保育者の退職者の約8割が1年以内に早期退職しているが、子どもが好きであるとともに子どものお世話好きでもあり、職場体験やボランティア活動を価値あるものと捉え、保育者になることを単に誰かに勧められたからという消極的な志望動機ではなかったことを報告している。

これらに加え、氏家ら（2013）によると、元男性保育者の半数以上が退職後も保育園や児童館に再就職していることから、彼らは子どもが好きであり保育関係に携わろうとする気持ちを読み取っている。その他、男性保育者の具体的な退職理由は、斎藤ら（2008）と同様、自分自身の保育技術の要因よりも同僚や上司との人間関係や低賃金を要因としている傾向にあつたことを報告している。これらの要因から、彼らは子どもが好きだけでは仕事が続けられないと行き詰まり、

精神的に不安定にある結果、早期退職となっていることを示唆している(氏家ら, 2013)。

このように、男性保育者に対する意識に関する研究は様々な対象から実施されている。しかし、世間では男性保育者への社会的期待の高まりという positive な側面がクローズアップされて目立っている傾向にあると考えられるが、その背景にある男性保育者に対する negative な側面から男性保育者の意識に迫っていくことも重要であると考えられる。なぜなら、男子保育者の実態を negative な側面から直視していくことにより、養成校の指導改善に寄与するための現実的な基礎的資料が得られるからである(戸田ら, 2017)。

しかし、男性保育者の早期離職者を調査対象にすることが倫理的問題によって困難であることから、彼らの早期離職に関する要因が行政に関連する待遇面や園内における人間関係や養成校の指導力不足、彼ら自身に起因するものであるのかどうかを特定することは困難である。そこで、本研究では、男子学生が保育者を志望する意識に着目することとする。その論拠として、男性保育者の早期離職者数が多いことから、幼児教育・保育系の専門学校・短大・大学を志望した男子学生の中には、少なからず消極的な入学動機の男子学生も含まれていることが推察されるからである。この点を明らかにすることは、今後の男性保育者の早期離職の問題に関する議論を深めるうえで社会的意義があると考えられる。

以上の点から、本研究では、男性保育者の早期離職者につながる要因を明らかにするため、男子学生が保育者を志望した時期と動機、今後の進路に関する意識を明らかにすることを目的とする。なお、本研究のデータは 10 年以上前のものであるが、近年における男性保育者の早期離職の問題を改善に導くための知見になると考えられる。

2. 研究方法

目的

本研究では、男子学生の保育者を志望した時期と動機、今後の進路に関する意識を明らかにすることを目的とする。

調査対象

東京都都内の養成校の学生 63 名(男性 40 名、女性 23 名)。

調査期間

2010年5月～6月

手続き

養成校の教員に調査協力を依頼し、質問紙の配布・回収を実施した（回収率；100%）。

調査内容

フェイスシート

学生の性別を尋ねた。

質問紙

以下、3点に関する質問紙調査を実施した。

①いつ頃から保育者を希望したか

- ・小学生以前から
- ・小学校の頃から
- ・中学生の頃から
- ・高校生の頃から

②保育者に興味をもったきっかけ

- ・こどもが好き
- ・職場体験
- ・ボランティア
- ・身近な人への憧れ
- ・身近な保育者への憧れ
- ・昔の園での楽しい記憶
- ・こどもの世話が好き
- ・親の勧め
- ・先生の勧め
- ・資格がほしい
- ・進路の決定

③将来の進路について

- ・資格を活かしたい
- ・迷いあり
- ・ならない
- ・なりたくない

なお、保育者に興味をもったきっかけについては、5件法で回答を求めた。質問項目の選定については、自由記述によって、保育者に興味をもったきっかけや将来の進路に関する項目を抽出後、養成校の教員3名により項目を選定して実施した。

倫理的配慮

調査対象者には、研究の意義、目的、研究への参加は任意であること、匿名性の保持の方法について、口頭で説明して同意を得た。

3. 結果と考察

本研究では、学生が保育者を志望した時期と動機、今後の進路に関する意識を明らかにすることを目的とした。

保育者を希望した時期について性差を検討するため、2（性別）×3（時期）のクロス表の χ^2 乗検定を行った。結果、有意な偏りが明らかになった（ $\chi(2)=11.61, p<.01$ ）。その後の残差分析の結果、女子学生は男子学生に比べ、「小学生以前より」を選択した者が多かった。一方、男子学生は女子学生に比べ、「高校時代から」を選択した者が多かった。

したがって、女子学生は男子学生よりも「小学生以前」から保育者を志望した学生が多いのに対して、男子学生は女子学生よりも「高校に入った頃」から保育者を志望した学生が多いことが明らかになった。

次に、志望動機の性差を検討するため、性別を独立変数として志望動機を従属変数とする t 検定を行った。結果、女子学生は男子学生に比べ、「身近な保育者への憧れ」の項目に関して有意に得点が高かった（ $t(63)=2.61, p<.05$ ）。また、男子学生は女子学生に比べ、「進路の決定」の項目に関して有意に得点が高かった（ $t(63)=2.88, p<.01$ ）。さらに、男子学生は女子学生に比べ、「資格が欲しい」の項目に関して有意に得点が高かった（ $t(63)=2.45, p<.05$ ）。

したがって、女子学生は男子学生よりも、「身近な人に憧れた」ことを強い志望動機としていることが明らかになった。また、男子学生は女子学生に比べ、具体的なきっかけが特にあったわけではなく、「進路を決めなければならなかった」ことを強い志望動機としていることが明らかになった。さらに、男子学生は女子学生に比べ、「資格が欲しかった」ことを強い志望動機としていることが明らかとな

った。

最後に、将来の進路について性差を検討するため、性別を独立変数として、将来の進路を従属変数とする t 検定を行った。結果、全ての項目において有意差は認められなかった。

以上の結果から、第1に、女子学生は小学生以前から保育者を志望した学生が多く、親・兄弟・いとこなどの身近な存在が保育士資格を取得していたため、彼らに対する憧れを保育者志望の理由としていると考えられる。なぜなら、女子学生は同性の大人の言動に同一視をし、その言動を模倣するという特徴があるからである。すなわち、女子学生の場合、幼児期に女性保育者を憧れの対象として認識する可能性が高いのであろう。よって、女子学生の場合、早い段階から保育者を志望していると考えられる。

他方、男子学生の場合、保育者を志望した時期は高校生の頃と非常に遅く、また具体的なきっかけが特にあったわけではなく、「進路を決めなかったから」、「何でもよいから資格が欲しかった」という理由を、保育者に興味を抱いたきっかけとしていると考えられる。このことから、高校卒業が目前に迫った男子学生の場合、早急に進路を決めなければならないこと、また、社会的にも資格取得の必要性があることから、「何でもよいから資格を取得しよう」という消極的な志望動機である可能性がある。このような志望動機を抱えた男子学生は、実際に現職保育者になったとしても早期離職につながる可能性が高いことが示唆される。

ここでの男子学生の「何でもよいから資格を取得しよう」という意識には、「こどもが好きだから保育者になりたい」という積極的な志望動機が含まれているとは言いきれない。しかし、男子学生が「単に何でもよいから資格を取得しよう」と考えたにもかかわらず、保育者を志すことのできる養成校を選択した理由には、少なからず「こどもが好きだから保育者になりたい」という意識が含まれていることが示唆される。

特筆すべき点は、現在、保育者志望の男子学生の中には、積極的または消極的な志望動機の二極化が起きている可能性がある点である。よって、養成校は男子学生の保育者志望の時期が女子学生に比べて遅いこと、志望動機の内容が消極的である可能性がある点を踏まえ、男性保育者の高い早期離職率との関係も視野に入れて指導していく必要があると考える。

具体的には、養成校には、学生の入学当初の初期段階から男性保育者の社会的役割や意義、必要性について、現職男性保育者が抱えている negative な側面も伝達していくことが求められであろう。

4. 今後の課題

今後の課題は、男子学生の保育者志望の時期と動機、離職との関係を縦断的に調査して明らかにすることである。具体的には、「単に何でもよいから資格を取得しよう」と考えていた男子学生を対象とし、インタビュー調査や事例分析を実施する中で、彼らが幼児教育・保育の養成校を選択したその理由を明らかにする。

また、保育者志望の男子学生の中には、積極的または消極的な志望動機の二極化が起きている可能性に鑑み、積極的または消極的な志望動機を抱く男子学生の割合を明らかにする。

【引用・参考文献】

柏まり・佐藤和順、2015、“子育て支援における男性保育者の役割に関する一考察”、就実論叢、第45号、275-286頁。

松本希・宮宅健人・澤津まり子、2014、“男性保育者に対する保護者の意識に関する研究”、就実論叢、第44号、303-309頁。

長田洋子、1997、“男性保育者の意識調査：男子卒業生へのアンケート結果の報告”、日本保育学会大会研究論文集、第50号、294-295頁。

中田奈月、2002、“男性保育者の創出--男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響”、保育学研究、40(2)、196-204頁。

齋藤政子、2002、“保育園に子どもを預ける親への男性保育者に関する意識調査の検討”、日本保育学会大会発表文集、第55号、370-371頁。

齋藤正典・平田健朗、2008、“保育現場における男性保育者に対する意識調査”、盛岡大学、第25号、67-77頁。

戸田大樹・松本佳代子・氏家博子・荒木由紀子・飯塚汐里・高橋健司、2017、“男性保育者の必要性和理想的な保育者の男女比に関する意識調査 — 保育者志望学生と女性保育士を中心として —”、教育学論集、第69号、3-17頁。

富田昌平・小野文子、2011、“男性保育者をめざした学生たちは今どうしているのか？（1）－保育専攻を卒業した男子学生への質問紙調査から－”、中国学園紀要、第10号、97-108頁。

氏家博子・松本佳子・戸田大樹、2013、“男性保育者の意識に関する調査－現職と離職者を対象として－”、第66回日本保育学会大会研究論文集、814頁。

安井恵子、2013、“保育者養成機関における男性保育者の養成について 卒業生にみる男性保育者の意識調査から”、滋賀短期大学研究紀要、第38号、55-66頁。

（受付日：2020年9月3日、
受理日：2020年12月28日）